

---

# ピター・チョコレート

如月春花

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ビター・チョコレート

### 【著者名】

N4735G

### 【作者名】

如月春花

### 【あらすじ】

一瞬惚れした彼女に告白した俺。彼女の返事、とは。

「あのや、俺お前のこと好きやねんけど。」

そんな風に彼女に告白をしたのは1ヶ月前のこと。

それまで友達として接してきた俺からの告白は、彼女にとって寝耳に水だつたらしい。

俺が見てきた彼女の表情の中で一番驚いた顔をしていた。

彼女と出会ってもつすべ1年。

季節は春で桜がきれいに咲いていたのをなんとなく覚えている。高校3年生になった俺がクラス発表の紙を眺めていると、何かが俺にぶつかった。

「あ、ごめんなさい……。」

そう言つてぺこり、と頭を下げていた女子。

その女子が顔を上げた瞬間、俺は何も言えなくなつた。

そう。柄にもなく俺は彼女に一目ぼれしてしまつたのだ。

運良く、というかなんというか彼女と俺は同じクラスになり。

そしてこれまで運良く、彼女と仲良くなることができたのだった。

彼女のことを探つて、俺はさらに彼女のことが好きになつた。困つた時に鼻を搔く癖、照れた時にすぐに真つ赤になつてはぐらかす癖。

そして、何よりも笑つたときにひびひとつ見えるその八重歯が可愛かつた。

けれど、どうやら俺は自分で思つていたより恋に奥手らしく。

今までアピールらしいアピールは何もできずにいた。

だから今回、突然の俺の告白に彼女は驚いた顔をしていったのだろう。

正直、アピールすらできなかつた自分が告白が出来たことが驚きだ。ただ、奥手な俺でもどうしても彼女に気持ちを伝えたかつたんだ。だから学校が明日から自由登校になる今日、彼女を呼び出して告白をした。

「あ、えっと…。」

突然の告白に言葉が出てこない様子の彼女。

しばらく彼女の言葉を待つっていたが彼女が話し始める気配はなく、ただ唸つてゐるだけ。

正直その沈黙に耐えられなかつた俺は、ある提案をした。

「一ヶ月後、卒業式の日に返事してもらつていい?」

自由登校は一ヶ月間。

自由登校、なんていうのは名前だけで実際は3年生にだけ与えられる長期休暇。

残りの登校日は卒業式の一日前だけ。

返事を卒業式にしてもらえば、彼女には1ヶ月間の時間があげられる。

そう思つての提案だった。

そんな俺の提案を受け入れて、彼女はひとつ頷いたのだった。

そして今日はその1ヶ月後の卒業式。

すべて終わった今。正直、卒業式なんてうわの空だった。この1ヶ月間は俺にとってとにかく長い1ヶ月間だった。

自分で提案しておいてなんだけど、1か月なんて長すぎる」と何度も  
つたことだ。「

けれど、そんな思いも今日で終わる。

良いにしても悪いにしても、今日が返事の約束の日だ。

「あのね、

彼女と一緒に来て、と連れ出された場所は公園。

そこにはベンチにふたりして腰かけながら俺は彼女の言葉に耳  
を傾けた。

「1ヶ月間す”い悩んだよ。

「…うん。」

「それで、ね？」

そう言って鼻を掻いた彼女。

「これ。」

そう言ってすっと彼女の手から渡されたのは小さい箱。

それはピンクのつぼんがかけてあってとても可愛らしくて、彼女らしい。

「それで返事になるから、…またね！」

そう言つていつもの笑顔で…いや、いつもより少し頼りない笑顔で  
微笑んだ彼女は俺の元を去つていった。  
残された俺は、彼女に手渡された箱を見つめる。

「……。」

彼女からちゃんとした返事がもうえなかつたことに幡然としながら、その箱の包装を開けた。

箱の上にはメッシュセージカードが入つていて、彼女の小さな文字で、『ありがとう』と書かれていた。

その意味が分からなくて俺は首を傾げる。

意味が分からぬまま箱を開けると箱に入つていたのはチョコレート。

さらうに意味が分からなくて、俺は傾けていた首をさらうに傾けた。

チョコをそのまま見つめても仕方がない。

意味は分からなかつたけど、彼女に貰つたチョコを俺は口に放り込んだ。

そして。

前に彼女が言つていた言葉を思い出した。

『映画でね、チョコレートの味で昨日の返事してたんよ。スイートやどく、ピターやどくやつて。なんかおしゃれー、つて思つてー。』

言いながら嬉しそうにほほ笑んだ彼女の顔を昨日のことのよつし思い出せる。

ついでに、

『じゃあ俺告白されたらどうやって返事しようかな』

なんて暢気に言つていた自分自身も。

そして今、俺の口の中にあるチョコレートの味、は。

「……………」  
「がつ。」

吐き捨てるようにうとうとして、彼女の返事を理解した。

ふと空を見上げるとそこにはまだ咲きそつにない桜のつぼみと、腹が立つほど澄み切った青空が広がっていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4735g/>

---

ビター・チョコレート

2011年1月27日06時13分発行